

遠くから誰かがしきりに話かけている。誰かを呼んでいるようでもある。それが何であるのか、はっきりしない。

はっきり判らうとするのも面倒だし、どうでもいいからユラユラと心地よい陶酔の只中へ再び入り込もうとしたその時、強い力で肩をゆすられミチは、何処からか無理矢理連れ戻されたような感覚だった。

ゆっくりと覚醒した意識が目の中の黒い物体を認識した。恐怖でヒツと、悲鳴とも叫びともつかない小さな声を上げたミチだったが、それががっしりとした肩幅を持つ男の姿であることが分ると、今度は今の状況が飲み込めずうろたえた。辺りはおぼろに周囲の物が見えるほど明るくなっていた。あれほど狂ったように降った雨が今はすっかり上がっている。だがミチの意識は朦朧としたままだった。

記憶を繋ごうとするのに何処かで途切れたままになっているらしく、いくら懸命に糸を手繰ってみても何処にも繋がらなかった。

男は傳五郎だと言った。ミチが山に登りかけにお辞儀をした農夫だった。

山に登ったまま大雨の中、日暮れになっても山を降りた気が無いので心配になり、夜が明ける前に家を出てミチを探しに上って来たのだった。

大きな背中に背負われて山を下り、女房が沸かした風呂で冷え切った体を暖めると、ミチにようやくやくものを考える力が戻って来た。

温かい湯船に浸かりながら天井や壁をつくづく眺めた。余りにも粗末な家である。腰板はめくれ、明り取りの違ひ戸は板が外れかけている。

風呂の入り口には戸の代わりに筵がぶらさがっていた。背負われて土間に入った時に気付いたが、カマドが無かった。煮炊きは囲炉裏が総てなのだろう。ミチが育った田耕の家や、父母が暮らす長府の家とは何もかもが違い過ぎていた。それにしても、とミチは思う。縁と言えはたった一度会釈を交わしただけ。

それだけの縁の者を氣遣って、夜明け前から山を上るとは、雲心月性の人とはこういう人のことを云うのではないだろうか。

ぐしよ濡れのミチを軽々と背負って歩く大きく逞しい背中、故郷の下男五助を思い出させた。

湯から上がった時には、ミチが着ていた物は総て洗濯がされ外の竹竿に干してあった。女房の借り着に袖を通して来ると、囲炉裏に掛かった鍋から物の煮えるいい匂いが漂って来た。

せかされて囲炉裏の前に座ったミチの前に、女房が椀にたっぷり雑穀の粥をよそって出した。野沢菜の漬物が添えてあ

る。

温かい粥と、噛み締めると口一杯に広がる野沢菜の香ばしい香りが、ミチをこの上なく幸せな気分にした。

しっかりと体を休めるようにと言い残して傳五郎は野良に出て行った。粥をいただいて、女房が横になるように勧めた布団は重ねた筵だった。

体を横たえると乾いたワラの匂いがした。畑に出ない時、故郷田耕の下男五助はいつもワラ縄をなったり、筵を編んだりしていた。懐かしい五助の匂いだった。

そして今のミチにとって、重ねた筵は真綿の布団よりも柔らかく優しく温かく感じられるのだった。

柔らかな眠りに誘われ、ミチは大きな安心に包まれ温かかった。

ミチは善光寺本堂の前に膝をつき両手を合わせ、深く頭を下げたまま暫く立ち上がれそうになかった。

大嵐に打たれ気を失っていたところを傳五郎夫婦に助けられたミチだけど、あの母娘は誰にも助けられずに死んでいった。

仇に遭えば、助太刀が無い限り二人は死ぬであろうことは分っていた。分っていたのに二人の命を助ける何の手助けも出来なかったことが辛かった。

次々に込み上げる涙をこらえ、心を込め二人の為に読経し

た。

笠の緒を結んで立ち上がったところへ、一人の旅の僧が本堂に近づくのが目に入った。一札をすると、低いがよく通る声でお経をあげ始めた。

本堂を背に歩きだしたミチの足が止まった。この声は？聞き覚えがある。

ひよつとして、啓雲さまではありませんか、とミチは僧の背後から声をかけた。

はたしてそれは、紛れも無く虫谷に直訴の村人を助けに帰った啓雲だった。